巨大な廃工場。
ひと昔前に閉鎖された廃工場の一階には埃を被った圧搾機が放置され、鉄骨の梁が幾何学的に交差した天井からは大振りのチェーンがたれていた。天井の近く、壁の高い位置に穿たれた窓は板で目張りされてるせいで昼でも全体に薄暗く、埃臭く陰湿な空気がよどんでいる。
仄暗い空間を照らすのは板の隙間から射しこむわずかな明かり。
高い位置に穿たれた窓。目張りされた板の隙間から仄かに射しこむ一条の光に薄く埃が舞うなか、静寂に溶けこむように工場の真ん中に佇むのは一人の少年。
肉の薄い瞼を閉ざした双眸は長く優雅な睫毛で縁取られ、ノーブルに筋が通った鼻梁はさながら生ける彫刻。
まるで豹のようだ。
人よりは獣に近い。
廃工場の中央、瞑想するかの如く瞼を下ろして黙していた少年がゆっくりと目を開ける。
三十メートル先に並んだ空き瓶の数は二十本。
左手でシャツの首元をまさぐり内側の金鎖を手繰り寄せる。
射撃訓練前には欠かすことができないまじないめいた儀式。
左手に絡めた金鎖の先端、金色に輝く十字架に軽くキスをする。
祈る神様を持たない人間でも、誰かに祈りたくなるときはある。
こんな風に。
『終わりの日には困難な時代がやって来ることをよく承知しておきなさい』
廃工場の仄暗がりに甘くかすれた声が響く。
それが合図だった。
『そのときに人々は自分を愛する者、金を愛する者、大言壮語する者、不遜な者、神をけがす者、両親に従わない者になり』
引き金を引く指は止まらない。
子供のように無邪気に、薄らと笑みさえ浮かべて銃を撃ちながら口ずさむのは聖書の一節。
『情け知らずの者、和解しない者、そしる者、節制のない者、粗暴な者、善を好まない者になり、裏切る者、向こう見ずな者、慢心する者、神よりも快楽を愛する者になり』
機械的なまでの正確さと精密さ。
銃弾の発射から瓶を撃ち抜くまでコンマ一秒の狂いもなく引き金を引き、聖書の一節を唱え続ける。
『見えるところは敬虔であってもその実を否定する者になるからです』
ここまで十本、全弾命中させることができたのは生まれ持っ

た身体能力の高さと幼少期からの訓練の成果だ。そのことについて特に感慨はないが、血なまぐさい環境に磨かれた人殺しの才能に助けられ、14歳になる今日まで戦場で生きながらえてきたのもまた事実だ。
実際彼に備わっていたのは人殺しの才能としか言いようがない危険極まりない性向だった。
物心付いたときから身の周りにあるものはなんでも武器にするように叩き込まれた。
銃がなければナイフ、ナイフがなければフォーク、フォークがなければ缶きり。日常身の周りに溢れてる何の変哲もない日用品や雑貨も彼の手にかかれば容易に人を殺傷できる凶器へと変貌した。
まだ試したことはないが、本の角で人を殺せる自負もある。
『こういう人々を避けなさい。こういう人々の中には家々に入り込み、愚かな女たちをたぶらかしている者がいます。その女たちはさまざまの情欲に引き回されて罪に罪を重ね、いつも学んではいるがいつになっても真理を知ることができない者たちです。また、こういう人々はちょうどヤンネとヤンブレがモーゼに逆らったように真理に逆らうのです。
彼らは知性の腐った信仰の失格者です』
コーラの空き瓶を的にして射撃訓練を始めたのは確か七才の時だ。子供の小さな手には発砲時の反動は凄まじく、手首を捻挫しそうな衝撃におもわず銃を取り落とした記憶がある。
体が大きくなるとともに骨格が成長した今では連射の反動にもラクに耐えられるようになったが、無理矢理射撃訓練をやらされてた子供の頃はいやでいやでたまらなくてよく訓練をサボって抜け出してきた。しかしサボったはいいが同年代の遊び相手もなし、他にやることもなく暇を持て余して仕方なく聖書を読んだ。
彼の母親はフィリピン人のキリスト教徒で、普段肌身離さず身に付けてる十字架も母から貰ったものだ。
人殺しの慰みに口ずさむ聖書の文句は、幼い頃、母親に読み聞かされるうちに自然と覚えてしまったものだ。
『バチあたりめ』
無意識に金鎖を手繰り、掌に乗せた十字架を見下ろしていた彼を我に返したのは男の声。
声がした方に顔を向ければ、汚れた迷彩服を着た男が工場の壁に凭れ、ウォッカの瓶をあおっていた。
『銃撃ちながら聖書の文句唱えるなよ』
『仕方ないだろ、癖なんだよ』
『キリストの怒りにふれるぜ。せめてさ、歌とか唄ったらどうだ』
年の頃は三十代前半だろうか。

お世辞にも美形とは言い難いが、精悍に日焼けした顔だちを一層魅力的に引き立てているのはスコールに洗われた空のようにカラッと晴れた青い目。
壁に凭れかかった男が古い英語の歌を口ずさむ。少年が知らない、男の祖国の歌だ。
『なんて歌？　結構好きかも、それ』
『レディ・ディことビリー・ホリディの「ストレンジ・フルーツ」』
歌詞を真似て唄い出せば、気持ちよく歌を口ずさんでいた男がウォッカに咽る。
『おま、おまえ音痴だなあ！　なんだそれ、本当におなじ歌か。ソウル・ディーバに失礼だろ、謝れよ』
『ああ？　んなことねえよ、ちゃんと唄えてるじゃねえか』
『耳腐ってんじゃねえか。それとも何か、生まれてくる前に悪魔にリズム感売り渡したのかよ』
何か言い返そうと口を開きかけた少年が、その指摘にふと押し黙る。
『―そうかも。悪魔にリズム感売り渡して人殺しの才能買ったんだよ、きっと』
『射撃上手い奴はリズム感に恵まれてるって言うけどな』
『迷信だろ』
悪戯っぽく笑い、男の隣に並んでもたれかかる。
男と並んで工場内を見渡す。目張りされた板の隙間から射した光が大気中に沈殿した埃をゆっくりかき回している幻想的な光景にそのまましばらく見入る。沈黙を破ったのは隣から聞こえてきたしゃっくりだ。
『で、今度の標的はだれだ』
残り少なくなったウォッカをちびちび舐めながらの質問にひょいと肩を竦めてみせる。
『日本の政府高官』
『Japan?』
『Yes.米軍と癒着して裏で武器とかバンバン流してる政界の大物みたいでさ、今度こっちに来るんだって』
『またなんだって戦争真っ只中のこの時期に』
『知らねえ。ジブンとこの軍隊の視察が目的じゃないの？日本も米軍に協力して軍隊とか物資とか派遣してるし』
『日本もなあ、憲法第九条があった頃はよかったんだけどなあ』
『なにそれ』
『平和を愛して戦争を憎む法律』
『ふーん。いい法律だ』
『昔話だよ。二十一世紀始まって早々にイラク戦争だなんだゴタゴタあってじきに改正、もとい改悪されちまった。第二次ベトナム戦争はじまると同時にアメリカの尻馬乗っ

てばんばん軍隊とか物資送りこんできたろ。おかげで東南アジア圏の人間にゃおなじイエローモンキーの裏切り者って憎まれて唾吐きかけられる始末だ』
『あんたがよく言う二十一世紀前半に道を踏み誤った国のひとつってわけ？』
『そういうことだ』
『……なんかすげー他人事に聞こえんだけど、米軍ドロップアウトしてこっち側に逃げてきたやつが偉そうに言う資格ないよな』
『しかたねえだろ、ほれた弱味だ。戦場で果たす運命の出会い、銃弾飛び交う死線上のロマンス！　しかもだ、ほれた女が反政府ゲリラの一員とあっちゃサム・ペキンパーの映画みたいによくできた話だと思わねえか？　さしずめ俺はジェームズ・コバーン』
『なにひとりで酔ってんだよ、寒いんだよ三十路。誰だよサム・ペキンパーって。マイク・タイソンの知り合い？　マイケル・ジョーダンの親戚？』
『まあそのへんだ』
そのへんてどのへんだよ、口には出さずに顔に不満を出す。マイケル・ジョーダンもマイク・タイソンも全部この男の口から聞いた名だ。特にこの男はマイケル・ジョーダンに心酔してた、百年以上前に活躍したバスケットプレーヤーの何にそんなに惹き付けられるのかと最初は醒めた気持ちもあったが男の口伝にマイケル・ジョーダンの凄さを聞くにつれどんどんのめりこんでいった。
よくよく考えれば見てきたようにマイケルの凄さを話す男も、過去に活躍したスポーツ選手を特集したテレビの映像や雑誌のスクラップでしか本人を知らないはずなのにと気付き、「騙された！」と我が身の不覚を呪ったものだ。
まあ、彼がマイケル・ジョーダンに心酔していたのはファースト・ネームが同じだからという単純な理由だが。
『どうやって近付くんだ？』
ふざけた口調で転落の軌跡を物語っていた男がさりげなく話題を変える。何を言われてるのかすぐわかった、どうやって標的に取り入るのかと探りをいれてるのだ。隣のしゃっくりを聞きながら、床一面に散乱した瓶の破片を見下ろしてあくびする。
『考え中。どうせ俺が考えなくても上の連中が考えてくれるし……ああ、体でたらしこむのもアリか』
『本気か？　その政治家って男だろ？』
『冗談だよ。そりゃ俺は男でも女でもかまわないけど一応好みがあるんだぜ、万年発情期の犬を見るような軽蔑の目を向けるなよ』
『……危険じゃねえのか、その仕事』

『危険に決まってんじゃん』
「いまさら何言ってんだ」とあきれて振り向けば、ウォッカを飲み干して瓶をからにした男がいつになく辛気くさく黙りこんでいた為、こういうしんみりした雰囲気に免疫がない少年は道化を演じきることに慣れたフリで朗らかに笑う。
『マジになんなって、ガキの頃からやってきたんだから今回も大丈夫だって！　やばくなったらパッと逃げてくるし殺られたりとっ捕まったりしねえから……あ、でもアジト吐かすために拷問されんのはやだなあ。俺好みの美女が足の裏に刷毛でハチミツ塗ってぺろぺろ舐めてくれるくすぐり拷問なら大歓迎なんだけど』
乾いた笑い声が萎んでいく。瞳の真剣さが度合いを増す。
『マイケル。マリアのこと、幸せにしろよ』
懇願、ではなく命令。
そうして男は口を開く、祖国の言葉で『憎悪』と名付けられた少年を安心させるために。
『ＯＫ，Ｍｙｓｏｎ』
まかせとけ、息子よ。
力強い答えを聞き、少年はホッと笑みを浮かべた。憑かれたように銃を撃っていた時からは想像もできないほどにあどけない、子供っぽい笑顔だった。『Ｎｏ』と言えば撃たれてたかもしれない、と不吉な考えが脳裏をかすめたのは男の口に目を凝らしてる間じゅうジーンズのポケットに手をかけてたのに気付いたからだ。おそらくは無意識の動作だろうが、あの褐色の手が目にもとまらぬ速さで銃を抜き取るところを想像して冷や汗をかいた。
銃がなければナイフ、ナイフがなければフォーク、フォークがなければ缶きり、缶きりがなければ本。
連想ゲームの臨機応変さで身のまわりの品々を武器に変える少年にはなるほど『憎悪』の名が相応しいかもしれない。
それでも男は余計な一言を言わずにはいられない、近い将来父親になる身として義理の息子が生まれついた宿命を嘆かずにはいられないのだ。
『レイジなんて似合わねえ名前だ』
『そうか？　ぴったりだろ』
進行方向の瓶を無造作に蹴りどけ、銃のグリップを握り締めて背中から鉄扉に寄りかかる。背中に体重をかければ錆びた軋り音をあげて鉄扉が開き、網膜を焦がす白熱の奔流が殺到する。
外の眩しさに目を細め、左手で手庇を作り、その影で右手の銃を掲げる。

『強姦されて孕んだガキにはさ』

熱帯気候の青空の下、乾いた銃声が轟いた。

そして、人が死んだ。30メートル先の茂みに潜み、少年を蜂の巣にしようとしていた米軍の兵士が。

少年がシャツの内側から引っ張り出した十字架にキスをする。

『終わりに言います。主にあってその大能の力によって強められなさい。悪魔の策略に対して立ち向かうことができるために神のすべての武具を身につけなさい』

銃がなければナイフ、ナイフがなければフォーク、フォークがなければ缶きり、缶きりがなければ本。

たった今人ひとり屠ったばかりだというのに、恍惚の笑みさえ浮かべて呟く少年は確かにその通り、敵の策略に対して立ち向かうためにすべての武具を身につけた稀有なる存在だった。

生まれ持った才能と素質を環境が研磨したら金剛石より強い光を放ちだすのは知れたこと……即ち無敵。

開け放たれた鉄扉の外、逆光を背に十字架にキスする少年の姿を見詰め、マイケルはため息まじりに考えた。

やっぱりコイツには、Rageの名が相応しいかもしれない。

手が追いかけてくる。

逃げても逃げても追いかけてくる手、手、手。

粘液質の汗で不快に湿った手が、乾燥してがさついた手が、不健康に静脈が浮いた手が。手といってもさまざまだ、ひとつとして同じ手はない。僕の体に触れる手のひとつひとつ、一本一本に特徴がある。背中を腰を胸を腹を臀部を下肢を、体の裏表隅々に触手の執拗さで絡みつき束縛し隙あらば奈落の淵に引きずり込もうとする無数の手。これは夢だとわかっている。睡眠中でも頭の一部は常に冴えていて醒めた理性が働いてるが、生々しい身体感覚を伴う悪夢を体験するとこれが現実なのか妄想なのか、正気と狂気の境界線が曖昧に滲み出して混乱してわからなくなる。

息を切らし、必死に逃げる。足首に巻き付き引き戻そうとする手を蹴散らし、後ろから肘を掴んだ手を邪険に振り払い、首を締めようとする手を激しくかぶりを振って追い払う。左右の肩にかかった手が強引に僕を足止めして振り向かせようとする、いやだ、振り向きたくない絶対に。二度と振り返りなどするものか、せっかく逃げ出してきたのに這い上がってきたのに今振り向いてしまったらまた地獄に逆戻りじゃないか。

地獄。思い出したくもない。

肩に乗った手を乱暴に振り落としてさらに加速して逃げ続ける、一心不乱にひたむきにどこまでもどこまでも逃げ続ける。

夢の中でも息が苦しいのは何故だろう、得体の知れない恐怖に追い立てられ心臓が早鐘を打つのは何故だろう。重力が増したように密度の濃い空気が四肢に纏わりつき真綿で締めるような緩慢さで徐徐に自由を奪ってゆく。

足が重たい、体が重たくて上手く走れない。交互に足を繰り出すだけでも強烈な眩暈に襲われて嘔吐しそうになる、駄目だ限界だ。

酸欠の苦しみに喘ぎ、速度を落とすと同時に背後から殺到してきたのは無数の手。腕に注射針の痕を残し、黄褐色に変色した薬物依存者の手が後頭部を鷲掴みにしてむらなく日焼けした逞しい手で羽交い絞めにされて白くふやけた不健康な手が太腿を這いまわる。手の持ち主の顔は振り向かないとわからないが振り向くことができない、否、振り向きたくない絶対に。振り向いたら後悔してしまう、僕が忘れようと自己暗示をかけて封印してる出来事を一気に思い出して発狂してしまう。

誰が自分を犯した男の顔を再び見たいものか。

一本、二本、三本……しめて三十四本、十七人分の手がそれ自体体から独立した生物のように自在に伸縮して追いかけてくる。今や完全に絡めとられて身動きができずぶざまに地に倒れ伏す、後頭部を押さえ込んだ手、背中を圧迫する手、左右の膝を割って太腿をまさぐる手。「やめろ」と声を限りに叫ぼうとして開けた口腔にも容赦なく指を突っ込まれ、唾液を塗りこまれるように粘膜をまさぐられ揉み解される。一本二本三本……そんなに入るわけがない、にもかかわらず涙目でむせ返った僕の口腔では無理矢理突っこまれた三本の指が淫靡に蠢いている。顎が外れそうになるまで口を開けて三本の指を飲み込めば喉の奥をまさぐる指の感触に強烈な嘔吐感がこみあげてくる、舌をつねり歯の窪みを辿る指の陰湿さに耐えている間もほかの手は止まることなく、シャツの背中にもぐりこんだ手が肩甲骨を撫で、ズボンの後ろもぐりこんだ手が臀部をまさぐり、ズボンの前にもぐりこんだ手が絶対他人に触れられたくない場所に侵入してくる。

気持ち悪いやめてくれ頼む放してくれもう解放してくれ。

気も狂いそうになりながら、口に指を突っこまれているため声には出せず懇願する。体の裏表至る所に手が侵入してくる、既に僕の体で他人の手に犯されてない場所などどこにもない。体の内側も外側も熱くて熱くてどうにかなってしまいそうだ、理性が蒸発して体の奥底で燻っていた淫蕩な熱をかきたてられ全身の細胞が溶解しそうに火照りだす。

『妹の名前を呼べば許してやるぞ』

唐突に、声が聞こえた。

それまで僕の耳には何も聞こえてなかったが、ひょっとしたらずっと前から聞こえてたのかもしれない。ただ逃げるのに必死で聞こえてなかっただけで。手で目隠しされてるせいで視界が塞がれて何も見えない、目の前にあるのはどこまでも続く暗闇だ。

『さあ言えよ』

命令調の声で強制され、体を硬直させ拒絶する。誰が言うか。惠は僕の妹、この世でいちばん大事な人間なんだ。僕はもう二度と惠の名前を呼ばない、幼い妹に泣いて助けを求めるなんてみっともない真似はしない、そんな醜態を晒すのはごめんだ。

惠にはいつまでも綺麗でいて欲しい。汚したくはない。

『言えよ』

『！』

僕の体を覆い尽くしていたおびただしい手が一斉に蠢きだす。指という指が体の先端の敏感な部分を刺激する、愛撫は次第に激しくなり擦りむけるほどに肌を摩擦する痛みを伴うようになる。熱に苛まれた体の芯が鈍く疼きだして腰が萎えそうになる。いつまで続くんだろうこの拷問は。早く終わって欲しいとそればかりを気も狂わんばかりに一心に念じるが愛撫ははげしくなる一方で、体が心を裏切って反応しだすのを自分の意志ではどうすることもできない。

反応？

馬鹿な、僕は不感症なのに何に反応するというんだ。それともあの一週間で、売春を強要されていたあの一週間で倒錯した快楽の味を覚えこまされてしまったのか？　まさかそんな、そんな馬鹿なことあるはずない。これは夢だ、悪い夢だ、今すぐに目を開けて目覚めなければ。こんなのは嘘だ全部嘘だ、僕が感じてるなんて欲情してるなんて絶対に嘘だ、男に無理矢理犯されて反応してるなんてあるわけない。

『言えよ』

前と後ろとをはげしく責め立てられて喉がひきつる。言いたくない、言いたくない。でも言わなければこの拷問は終

わらない、延延と苦痛が長引くだけだ。ただ一言言ってしまえばラクになる、長い悪夢から解放されて現実に浮上することができる。

めぐ、み。

『そんなんじゃ聞こえねえよ。もっと大きくはっきりと、』

めぐみ。

『男にヤられながら妹の名前呼ぶなんて変態だな』

めぐみ。

『本当はずっと妹とヤりたかったんだろう。妹のひらたい胸を揉んでかわいく窪んだヘソを舐めてまだ毛も生えてない股に突っ込んで喘がせたかったんだろう。はは、残念だったな！　妹ヤるまえに男にヤられちまったら世話ねえな。妹独り占めしたくて堅物の両親殺したくせに目論見外れてがっかりだろ。まあ諦めろ、一度東京プリズンにきちまったんなら腹括って俺のご機嫌とりに徹すんのが吉だ。そうそう、そうやって素直に股開いて腰振って言うこと聞いてりゃいい。なあ、男に抱かれんのは癖になるだろ？　なんだ、泣いてんのか。もうイッちまいそうってか。まだ駄目だ、俺がイくまでイかせられねえな。もうちょっとそのまま我慢してろよ。不感症のくせに不能じゃねえなんて都合いいカラダだな、本当に』

めぐみめぐみ。

『ああ、やっぱりだ……妹の名前呼ばせると締まりよくなるな。興奮してんのかよ近親相姦の変態が』

めぐ、み、めぐ、

助けてくれ誰か助けてくれもう嫌だ体も心も壊れてしまうばらばらになってしまう、今すぐに舌を切り落としたいもう恵の名前なんか呼ばないようにこれ以上汚して貶めないように。誰か僕を殺してくれ今すぐに殺して息の根を止めてくれ、まだプライドが残ってるうちに理性が残ってるうちに僕が鍵屋崎直でいられるうちに殺してくれ。

リュウホウすまない、僕は自殺する勇気もない。自分で自分を殺すことさえできない臆病者の小心者で今から他人の手を汚そうとしている、でももうどうしようもない、こんな毎日が続くなら死んだほうがマシとしか思えない。君の最期を目に焼き付けた手前死んだほうがマシなんて軽軽しく口にしたくないのにでもどうしてもその結論に行き着いてしまう、何故だ、いつから僕はこんな惰弱で見下げ果てた人間に成り下がったんだ？　最悪だ、もう本当にこんな自分には愛想が尽きた。ぼくは選ばれて生まれてきた人間のはずなのに、この刑務所のだれより賢く知力に優れた天才のはずなのにこれじゃまるで飼い殺しにされる運命に生まれついた鎖つきの家畜じゃないか。

このまま懲役を終えるまで刑務所で飼い殺しにされるくらいなら本当に殺されたほうがマシだ。
体を這いまわる手に拡散しかけた理性をかき集め、這いずるように前に進みながら口の中で名前を呼ぶ。僕がこの刑務所で唯一信頼できる男の名を、生まれて初めて友人と認めて心を許した男の名を。
そして頼む。
手で目隠しされた暗闇に溺れてもがきながら、こちらに背中を向けて佇んだ男の幻影に。

「殺してくれ、サムライ」

その瞬間目が覚めた。
一瞬自分がどこにいるかわからなくなる。寝返りを打つ度に筋肉痛になる固いベッド、上を見上げれば配管むきだしの殺風景な天井がすぐそこまで迫っている。
僕が日常寝起きしてる房、寝心地の悪いパイプベッドの上。瞼を開けると同時に反射的に上体を起こし、今にも倒れそうな体をベッドの背格子に凭せ掛けて呼吸を整える。気付けば全身にびっしょりと汗をかいていた。冷や汗だ。汗で湿った囚人服が皮膚に密着して気持ち悪い。薄く汗が浮いた鎖骨に目を落とし、無意識な動作で上着の裾に手をもぐりこませる。悪夢の中、体中を這い回った手の感触がまだ生々しく残っているようだ。下肢を割って太腿をなでる手の感触も臀部をなぶる手の感触も、現実に体験したことだけにとても夢とは思えない鮮明さで感覚的に再現されている。
僕が寝てるあいだ、だれかが体を触ってたんじゃないか？そんな錯覚に囚われてはじかれたように房を見渡すが怪しい人影はない。当たり前だ、消灯時間が過ぎたら内側からの施錠が義務付けられているのだ。合鍵でも持ってるなら別だが、鍵開けの技術も持たない囚人が容易に忍び込めるはずがない。寝起きの緩慢さで首を巡らして隣のベッドに視線を放る。サムライは寝ているようだ。寝言は聞かれなかったらしい、とまずはそのことに深く安堵する。
今は何時だろう。
正確な時間はわからないが、おそらくは深夜に近いらしく暗闇の濃度が増している。一度目が覚めたら当分寝られそうにない。いや、本音を言えばもう寝たくない。
寝るのが怖いのだ。
以前の僕が見る悪夢の内容は大抵決まっていた。戸籍上の両親、鍵屋崎優と由佳利を刺殺して惠に糾弾される夢。リュ

ウホウの自殺を食い止められず、天井からぶらさがった首吊り死体を前に無力に立ち尽くす夢。でも今は違う。最近僕が見るのは「手」に追われる夢だ。売春班で売春を強要されてた一週間で僕の精神力は相当に磨り減っていたようだ、それこそ誰より何より大事な惠の存在を頭の隅に追いやってしまうほどにあの一週間で見た地獄が体に染み付いて頭の中心を占めている。

睡眠薬が欲しい。

睡眠薬を服用すれば悪夢に悩まされることなく熟睡できる。そんなことを考えながら床に足をおろしてスニーカーを履く。汗にまみれた顔が気持ち悪い、一刻も早く顔が洗いたい、水が飲みたい。体中の水分が蒸発して喉がからからに渇いている。夢遊病者のようにふらつきながら洗面台に行き、蛇口を捻る。両手で水を受けて顔を洗い、水をすくって飲む。衛生面で不安が残る東京プリズンの水道水を飲むことにもう抵抗もなくなった。蛇口を締めて顔を上げ、正面の鏡をまともに覗きこめば酷く憔悴した自分の顔が映る。眼鏡をしてないせいで鏡に映った顔がぼやけている。そういえば眼鏡をはずした自分の顔をちゃんと見たことがない。日常生活に支障がでるほど視力が悪いため、裸眼で鏡と向き合った自分の目鼻立ちを正確に把握することができないのだ。写真を撮る時は必ず眼鏡をかけているから、写真でさえ自分の素顔を見たことがないという事実にいまさらながら直面する。

「……」

ふと眼鏡をはずした自分の顔が見てみたくなり、わずかに身を乗り出して鏡に目を凝らす。馬鹿げてる、視力が悪いんだから土台不可能なのに。しかしこの至近距離で鏡の中の顔が判然としないというのも悔しい、鏡に引き込まれるように身を乗り出して目を細めた僕の眼前で前ぶれなく異変が起きる。

あろうことか鏡が歪み、水面の波紋に飲み込まれるように僕の顔がかき消え、立ちかわり現れたのは小柄な少女。いつもだれかに詫びてるようなおどおどした表情、人の機嫌の良し悪しに敏感な小動物めいた目。知っている。いや、知っているも何も忘れるわけがない。誰がこの世でいちばん大事な、たった一人の妹の顔を見忘れるというんだ。みつあみに結った髪を肩にたらし、俯き加減に立ち尽くしたその少女の名前は――惠。

僕の心の支え。最愛の妹。自分の身を犠牲にしても守りたい対象。

「めぐ、み？」

声が震えた。自分の目に映るものが信じられない。覚めながら夢を見ているのだろうか？　―いや、どうでもいい。こうして恵と会えただけで十分だ。鏡の中に立ち尽くす恵へと誘われるように手を伸ばす。緊張に震える指先がもう少しで鏡の表面に触れようとしたその時だ、鈴を鳴らすような声が響いたのだ。

『汚い』

おそるおそる鏡の表面に触れようとした指が止まる。

恵がゆるやかに顔を上げる。その目にあったのは冷ややかな軽蔑の色、僕が触れることを頑なに拒む断罪の意志。

『さわらないで。おにいちゃん汚い』

「汚い？」

『汚いじゃない、だって男の人とセックスしたんでしょう。気持ち悪い、考えられない。そんなの恵のおにいちゃんじゃない。恵のおにいちゃんはそんなことしない』

『おにいちゃんはいつだって恵を庇って守ってくれるの。お父さんに怒られたときもお母さんに怒られたときも学校でいじめられたときもいつだって慰めてくれた。恵は悪くないって言ってくれた。恵をいじめるやつはぼくがどんな手を使っても懲らしめてやるって』

「そうだ、そのとおりだ。僕は恵を守る、死ぬまで守り続ける。それが僕の生きる意味だ」

『うそ。刑務所の中でどうやって恵を守るのよ。恵は今精神病院の白い部屋に閉じ込められてるのよ、おにいちゃん全然守れてないじゃない。おにいちゃんのうそつき』

「ちがう」

『おにいちゃんは嘘つきで汚い最低の人間だ』

「ちがうそうじゃない聞いてくれ、」

『今だって嘘をついてる。大事なお友達にも嘘をつき続けてる』

「頼むやめてくれ、それ以上言うな」

『お兄ちゃんがお父さんとお母さんを殺したなんて嘘よ』

「嘘じゃない、致命傷を与えたのは僕だ。今でも鮮明に覚えている、父さんの、鍵屋崎優の右胸にナイフを刺して引き抜く感触を。手を濡らした血液の生温い温度と赤さを」

『最初にナイフを取ったのはお兄ちゃんじゃないでしょう』

「僕が殺したんだ」

『嘘つき嘘つき嘘つき嘘つき』

恵の唇が動く。うそつきうそつきうそつき…連綿と囁かれるのは断罪の言葉、無邪気にさえずるような呪詛。声の軽やかさとは裏腹に恵の顔には何の感情も浮かんでない。陶器の人形めいた固さの無表情で呪詛を吐き続ける恵から逃れたい一心で頭を抱えこみ話題を変える。

「知ってるか恵？　心臓は胸の中央やや左側にあり、全身

に血液を送り出すポンプの役割をしている。隔壁と呼ばれる筋肉の板で左右に分けられてて、それぞれの側がさらに弁を境に上部の心房と下部の心室に分かれている。要するに右心房・右心室・左心房・左心室の４部屋に分かれている。まず左右の心房が収縮し血液が心室に押し出される。次に心室が収縮し心室にあった血液が動脈を通って全身あるいは肺に押し出される。心臓はこの収縮サイクルを繰り返す。肺で酸素を得た血液は肺静脈から左心房に入り、左心室から大動脈を通って全身に送り出され……」

『……嘘つき嘘つき嘘つき』

「だから人を確実に殺したいときは心臓を刺せばいいんだ深く深く手に体重をかけて。僕は医学書で読んだ通りに実践した、そして鍵屋崎優と由佳利は失血性ショックで死んだ。僕が得た知識は正しかったと証明されたんだ、彼ら二人の死によって。はは、僕は天才だろう？　当たり前だ、そうなるように設計されて生まれてきたんだから。だから認めてくれ恵、僕がしたことを認めてくれ。全部恵を守るためにしたことなんだ、あの場はああするより仕方なかった。鍵屋崎由佳利まで殺したくはなかったがやむをえない、一部始終を目撃してたんだから」

『嘘つき嘘つき嘘つき』

―「仕方ないだろう!!」―

そうだ仕方ない、恵を守るためにはやむをえない処置だった。僕が犠牲になることで恵の将来に傷がつかずにすむなら喜んで罪を被る、鍵屋崎優と由佳利にとどめをさす。だって恵は僕が生きる理由の全てで、僕が生きる意味で……そして恵が、鏡の中の少女が決定的な一言を放つ。まだ塞がってもいない傷口を抉る残酷な台詞を。

『カギヤザキ　スグルなんか死んじゃえ』

そうか。僕にはもう、「おにいちゃん」と呼ばれる資格さえないのか。

「おにいちゃん」と親愛をこめた呼称で呼ばれるのが嬉しかった。恵に懐かれてることが実感できて、たまらなく嬉しくて幸せだった。

だから、恵のおにいちゃんでなくなった僕などもうどうなってもかまわない。

無造作に拳を振り上げる、拳が裂けて血にまみれてもかまうものか。もうこれ以上恵の顔を見続けるのは耐えられない、呪詛を聞き続けるのは耐えられない。あんなに恵の顔が見たくて、声が聞きたくて気も狂いそうだったのに今は破壊衝動に突き動かされて高々と拳を振り上げている。

ぶざまだな。

そして、鏡に映った惠めがけ渾身の力をこめて拳を振り下ろし―
その手首が、後ろから掴まれた。

「何をしている」
振り返ればサムライがいた。いつのまに起きたのだろう、全然気付かなかった。
「離せ！」
鏡の中に向けられていた憎悪が一気に沸点に達してサムライに転じる。サムライの手を振り払おうとはげしく身を捩って抵抗すればますます強く掴まれて苛立ちが募る、なんで邪魔するんだ、邪魔しないでくれ！　理性をかなぐり捨てて鏡めがけて手を振り上げれば背後から抱き竦められ動きを封じられる、それでもなお暴れ続ければ僕を背後から抱きしめたままのサムライともども床に転倒する。
鈍い物音、衝撃。
それでも痛みを感じなかったのはサムライがしっかりと僕の体を抱きとめて衝撃を緩和してくれたからだ、サムライを押し倒す格好で床に転倒した僕は即座に起き上がるや、自分の下になった男の襟首を掴んで責め立てる。
「なんで邪魔するんだ、どうして止め……」
不自然な箇所で言葉が途切れたのは、僕に組み敷かれたサムライの額に大量の脂汗が滲み出してるのに気付いたからだ。様子がおかしい。床に倒れたサムライを注意してよく眺めれば、転倒した際に変な方向に捻ったらしい手首が赤く腫れているのが目に入る。
頭に昇っていた血が急速に下降し、四肢の端々の体温が急激に低下してゆく。
「捻ったのか⁉」
「……たいしたことはない」
腫れた右手首に左手を添え、大儀そうに起き上がったサムライだが苦痛にしかめた顔を見れば痩せ我慢してるのは一目瞭然だ。
「たいしたことあるだろう‼」
早く医務室に連れて行かなければ、放置しておけば腫れが酷くなる。一刻も早く冷やさなければ……サムライに肩を貸して立ち上がりかけ、ある事を思い出して立ち竦む。

ペア戦開幕は、明日だ。

医務室は深夜でも開いている。
いや、開いてなかったとしても無理矢理にでもこじ開けるつもりだ。
サムライに肩を貸して夜気がひんやりと身に染みる廊下を

歩く。幾つかの角を曲がってひたすら歩けば渡り廊下に到達、そこから中央棟へと向かい医務室に直行する。消灯時間を過ぎて出歩いてるのを看守に見咎められればどんな罰を受けるかわからないがそれどころじゃない、今はサムライの手首の治療が最優先事項だ。蛍光灯が心もなく照らす廊下には歩調をあわせる僕らの他に人影もなく閑散としている。こうして肩を貸していてもサムライの呼吸が浅く乱れ、額にはおびただしい脂汗が浮きだしているのがわかる。医務室の扉が見えてきた。

「急患だ、応急処置を頼む!!」

嵐のようなノックを降らせて、扉に体当たりするように医務室に雪崩こむ。白い衝立で仕切られたベッドの手前は診療スペースとなっており、消毒液や包帯などがきちんと整頓された戸棚に面してステンレスの机が置かれていた。そして、机の前の革張りの椅子には首から聴診器をさげた医師が腰掛けて何事かと大きく目を見張って深夜の闖入者を凝視している。

「どうしたのかねこんな時間に」

「手首を捻ったみたいなんだ、早急に処置を頼む」

サムライに口を開く暇を与えずに早口に用件を告げる。革張りの椅子の対面、患者が腰掛ける用の椅子にサムライを座らせ、未だ事態が飲み込めずに面食らっている医師に語気荒く詰め寄れば僕の剣幕に圧倒された医師が迅速に動き出す。慎重にサムライの手首を取り様子を見てからしかめつらしく診断を下す。

「ふむ。どうやら手首を捻ったみたいだ」

頭に血が昇った。

「だからそう言ってるじゃないか!!」

「落ち着け鍵屋崎……、」

「落ち着いてなどいられるか君はなんでそんな冷静なんだ!?右手が使えなくなったら困るだろう箸が握れなくなる、箸が握れないということは食事できなくなる、それに筆、筆が握れなければ写経できなくなる！　いや違う、もっと大事なことがあるだろう、そうだ刀……」

刀。

明日はペア戦だ。

「付き添いは外に出ていてもらえるかね」

完全に気が動転した僕を扱いかねた医師が遠慮がちに、しかし有無を言わさずに申し出る。対面式に腰掛けたサムライの手に氷水で冷やしたタオルを当てながら迷惑そうに眉をひそめて振り返る。

「嫌だ、貴様は医者として信用できない。僕が以前医務室を訪ねた時なんて診断を下したか忘れたとは言わせない、特に別状はないと右手に包帯だけ巻いて追い返したじゃな

いか。何が別状ないだ右手にヒビが入ってたんだぞこの耄碌した藪医者め。藪医者の語源を知ってるか？　そうか知らないか、なら無知な貴様の為に特別に教えてやる。藪医者の語源は諸説あるが『野巫医者』を語源とし、『藪』は当て字とする説が有力とされる。野巫は田舎の巫医とも言われ、呪術で治療する田舎の医師のこと。あやしい呪術で治療することから「いい加減な医者」、たった一つの呪術しかできなかったことから下手な医者といった意味で野巫医者という言葉が生まれたとされ……」

「落ち着きたまえ」

「離せ！」

肩に置かれた手を激情のままに振り払えば次はもっと強く肩を掴まれる。そして気付く、誰が僕の肩を掴んでるんだ？　サムライと医師は目の前にいる、じゃあ僕の背後に立っているのは？　ぽかんと口を開けた医師と唇を一文字に引き結んで痛みを堪えるサムライ、対照的な二人の視線の先を振り返れば意外な人物がいた。

安田だ。

「何故ここに……、」

安田の顔を見た瞬間、急速に膨れ上がった疑問が一時的に興奮を駆逐した。数日前売春通りで見た時と殆ど同じ格好をしているように思えるのは安田が陰鬱に沈んだダーク系のスーツしか身につけないからだ。銀縁眼鏡の奥、剃刀のような知性を帯びた双眸を鋭く細めた安田が放心状態の僕の腕を引っ張って強制的に医務室の外へと連れ出す。

逆らう気は起きなかった。

されるがままに腕を引かれて医務室から外に出される間際に振り返ればサムライが手首の治療を受けているところだった。右手首に巻かれたタオルの冷たさが骨身に染みるのか僅かに顔をしかめている。その横顔を深い悔恨とともに胸に刻みこんで廊下に出れば背後で扉が閉ざされる。

深夜、人気のない廊下に閉め出されて途方に暮れて立ち竦む僕の隣には安田がいた。何が起きたのか正確には理解しないまま、僕の頭を冷やすために廊下に連れ出したのだろう安田が訝しげに顔を覗きこんでくる。

「いい加減手を離してくれませんか」

「すまない」

指摘され、初めて僕の腕を握ったままでいたことに思い当たったらしい安田がよそよそしく手を放す。安田に掴まれた腕をさすりながら白くペンキを塗られた医務室の扉を見つめる。中で何が行われているかは殆ど物音が聞こえないため窺い知れない。サムライの手首は大丈夫なのか？　あの藪医者はちゃんと治療してくれるのか？　深夜の急患のため医務室はいつでも開放されているがあくまで形だけ、

肝心の医師が役に立たなければ話にならない。信用？　できるはずがない、半年前僕の右手に包帯だけ巻いて「別状はない」と追い返した老人だぞ。何が別状ないだ、右手の骨にひびが入っていて完治に二ヶ月費やしたじゃないか。今度またいい加減な診断を下したらただじゃおかない、僕は東京プリズンによくいる何でも腕力で解決できると思い込んでいる野蛮人ではないから暴力的な手段には訴えないがあの藪医者を床に正座させて傍らに分厚い医学書を積んで医学の基礎の基礎から復習させ性根を叩き直すくらいのことはやる。

焦燥に揉まれ、廊下の壁に凭れて所在なげに立っていれば横顔に視線を感じる。反射的に顔を上げればずっと僕の横顔を見ていたらしい安田と目が合い、お互い非常に気まずい思いをする。

どちらからともなく顔を伏せる。サムライの治療が終わるのをただひたすら待つ苦痛な時間。

「何があったんだ？」

そう聞いてきたのは安田だった。沈黙の重圧に耐えかねたか、無意識にスーツのポケットを探っているのは喫煙者の癖だろう。安田の方は見ず、蛍光灯の影が落ちた廊下に視線を放りながら返事を返す。

「あなたには関係ありません」

これでも自制心を総動員して応したつもりだが安田は気に入らなかったようだ。胸ポケットにかけた手をおろし、レンズの奥の目を僅かに細め、医務室のドアと僕の横顔とを見比べながら慎重に口を開く。

「……見たところ彼は手首を捻挫していたようだが、ペア戦開幕は明日だろう」

「はい」

「彼はレイジと組んで出場するんだったな」

「はい」

「それは」

そこで言葉を切った安田が、僕の顔色を窺うように低い声で念を押す。

「まずいんじゃないか？」

「わかってる」

そうだわかっている、誰よりもよくわかっている。ペア戦開幕は明日、今は深夜だからあと数時間しかない。それなのに僕の不注意でサムライは怪我をした、他でもない効き手に、刀を握る大事な右手に。僕は馬鹿だ、売春班から足を洗ってもう数日が経つのに未だに悪夢から抜け出せずに幻覚を見てサムライにまで迷惑をかける始末だ。東京プリズンに惠がいるわけないじゃないか、惠は今仙台の小児精神病棟に入院してるんだ。仙台から東京までどれくらいの

距離があると思ってる？　惠は超能力者じゃない、超能力なんて非科学的な現象は断じて認めない。だから瞬間移動はありえない、深夜、闇の帳が落ちた鏡の中に見出した妹の幻は自己嫌悪の産物で現実にはありえないことなのだ。とりとめないことを考えて気を散らそうとするが駄目だ、どうしても意識が背後の扉へと向いてしまう、強力な磁力でもって引きつけられてしまう。思考が支離滅裂でまとまらない、頭と心が完全に分離して自分でも何を言ってるかわからずにますます混乱してくる。サムライの様子が気になる、手首の具合はどうだ？　もし彼が手首を捻挫して明日のペア戦に出場できなくなったら僕のせいだ、僕はまた彼に迷惑をかけてしまう、足手まといになってしまう……

「顔色が悪い」

「よくなりようがない」

隣に凭れかかった安田に指摘され、苛立ちをぶつけるように切り返す。天井と床が平行にのびた廊下に立ち尽くしてただ待つしかないのは精神的拷問にひとしい。白々と輝く蛍光灯の光を浴びながら立っていれば安田がまた声をかけてくる。

「痩せたんじゃないか」

「……少し体重は戻りました」

なんなんだ一体、僕はとてもじゃないが安田の世間話に付き合えるような精神状態じゃないというのに。それとも安田は沈黙に耐えられず、特別親しくもない他人にスキンシップを求めてくるような傍迷惑なタイプの人間なのか？　だとしたらこの男に対する評価を大幅に下方修正しなければならない。舌打ちしたい気分で返事をするが口にした内容自体はまったくの嘘でもない。売春班の業務が休止されてから一週間で3キロ近く減った体重が多少は戻ったのだ。食べ物を口にいれても直後に吐かなくなったし大分マシになったと思う。

「……そうか。君は少し痩せすぎだ、もっと食べたほうがいい。育ち盛りなんだから」

「じゃあ食堂のメニューを改善してください、少なくとも人間の舌に合うように」

「考えておく」

「中華をメニューにくわえたらどうですか。この刑務所で最も多くの人口を占めているのは中国系の囚人ですし」

「考えておく」

「口だけなら何とでも言える」

はっきりそれとわかるように冷笑する。言動の端々がひどく攻撃的になっている自覚はあるが自重する気は微塵もない、こうして安田と二人きり、誰にも邪魔されずに会話できる機会などもう永遠に訪れないかもしれない。それなら

ば婉曲に腹の探り合いなどせず直裁に核心に触れるべきだ。銀縁眼鏡のブリッジを押さえ、反感に波立つ心を何とかしずめようと努力しながら口を開く。

「僕からも質問させてください。何故今まで売春班を、いや、ブラックワークの存在そのものを放置してきたんですか」

安田は東京プリズンの副所長の地位にある若きエリートだ。いかに彼が無力とはいえ、その気になれば売春班などどうにでもできたはずだ。看守の恨みや囚人の不満を買うのは避けられない事態だろうが、もし本気で売春班の現状を、ひいてはブラックワークの制度自体を憂慮していたのなら多数派の賛同を得なくても副所長権限で廃止なり休止なりに追い込む強行手段にでることも厭わないはずだ。

それともこの男は、おのれの下で働く看守や何百何千という囚人の非難の矢面に立つのが怖くて今まで手をこまねいて静観してきたというのか？

「……煙草を吸ってもいいか」

「最低5メートルは離れてください」

いや、僕が離れる。安田から5メートルの距離をとればライターを点火する音が聞こえてくる。煙草に点火して深く紫煙を吸い込む。天井に設置された蛍光灯がよわよわしく点滅する中、コンクリートの陰鬱な色彩に溶け込むように廊下に佇んだ安田がうっそりと紫煙を燻らせる。

「……東京プリズンに収監されているのは日本で罪を犯した人間だけではない」

「？」

「囚人で知っている者は少ないだろうが東京プリズンには海外で罪を犯した者が多数収監されている。いずれも日本人に対して罪を犯した者や日本という国家に重大な損害を与えた凶悪犯に限られるがな。中には本国で手におえなくなり、東京プリズンの風評を聞いた海外政府から頼むからこちらで預かってくれと流されてきた者もいる。早い話たらい回し……いや、厄介払いが正確か。近年日本も治安が悪くなったと言われているが海外にはもっと治安が悪化して手がつけられなくなった国が多くある。たとえば第二次ベトナム戦争の戦火が拡大して否応なく戦争に巻き込まれた東南アジア圏の国々、ここ十年は特にフィリピンの治安悪化が著しい。米軍侵略以降、反政府ゲリラとの対立が激化してもう手がつけられない状態だ。たとえば韓国。二十世紀前半に朝鮮韓国が併合され半島統一が実現したのはいいが社会主義と資本主義に二分化した溝を埋めるのは容易ではない。実際朝鮮政府の負債を補填するために韓国は巨額の国費を費やし、結果として深刻な不況に陥り国民の反発を招いた。自分たちが貧しくなったのは朝鮮と併合した

からだと考える人間があたらしい世代から出てきたのだ。今では韓国独立、または朝鮮独立をスローガンに掲げて過激なテロ活動に身を投じる人間もいる始末で半島からの亡命者が日本に大挙して渡ってきて都心に一大スラムを作っている」

「知っています。常識です」

「そうか。なら東京プリズンで非常識が常識としてまかりとおるのもわかるな」

「……」

「正直ここの囚人は手におえない。何かのきっかけで不満が爆発したら看守が束になってかかってもその勢いを押しとどめることはできないだろう。売春班を含めたブラックワークの存在がこれまで黙認されてきたのはいみじくも需要と供給が成立していたからだ。もちろん売春夫を買いに来る客の中には看守も含まれるが囚人に比べたら微々たる割合だ。規則に縛られた窮屈な生活の中、ブラックワークは数少ない娯楽として、貴重な息抜きの場として機能して東京プリズンの日常に溶け込んでいるのだ」

「息抜きですか？　僕を、僕達を抱くのが」

笑い出したくなる。二の腕を抱いて自嘲の笑みを浮かべた僕をちらりと一瞥して安田が結論する。

「……君たちにはすまないことをしたと思っている。しかし仮に看守の反対を押し切り、囚人の意向を無視してブラックワーク撤廃に乗り出したとしたら多数の死傷者をだす大規模ストライキが起きる可能性がある。刑務所でストライキが発生して死傷者をだすなど、万が一そんな醜聞が外に漏れたら日本政府の恥だ」

「東京プリズンの存在自体が恥です」

間髪いれずに結論を奪えば、指の間に吸いさしの煙草を預けた安田がため息まじりにかぶりを振る。

「……否定できないな」

安田の話を聞いてよくわかった、彼は有能だが保身を第一に考えるエリートの典型だということが。やり場のない苛立ちと怒りがこみあげてきて無造作に片手を突き出す。おもむろに突き出された手を怪訝そうに見下ろす安田に一息に畳み掛ける。

「煙草をくれませんか」

安田の顔に驚きの波紋が広がる。しかし次の瞬間には手の内を見せない表情を取り繕うや、胸ポケットから取り出した新しい煙草を僕に手渡す。

「君は嫌煙家じゃなかったのか」

「ニコチンは精神安定剤になるんでしょう」

安田にライターを借りて点火すれば穂先に赤い光がともる。とにかく今は忌むべき有害毒素、ニコチンの力を借りてで

も気の昂ぶりを沈静化させたい。そうでもしないと安田に殴りかかってしまいそうだ。いつだったか、展望台の突端から足をたらしたロンが煙草をくわえていたのを手本にして真似してくわえ……

扉が開いた。

「！」

煙草を口にいれて振り向けば仏頂面のサムライがいた。右手首に包帯を巻いて。

「全治二週間だそうだ」

絶句する。やはり僕を庇って転倒した際に右手首を捻挫していたのだ。全治二週間、ということは明日の試合、いや、その後の試合にも影響がでるではないか。また僕はサムライに迷惑をかけしてしまった、そもそも平和主義者のサムライがペア戦出場を決意したのは僕を売春班から助け出すのが動機なのにこともあろうにその僕が……

怒っているのだろうか、見た目はいつもと変わらない仏頂面のサムライがひとりで歩き出そうとするのに有無を言わさず肩を貸す。そうして歩き出そうとして、ふと脳裏に疑問が過ぎる。

「何故医務室に？」

安田を振り返り質問する。何故こんな深夜に、人目を盗むように医務室を訪ねてたのか？　一見したところ怪我をしてるふうでもなし、安田が医務室を訪ねた動機がわからなくて率直に聞けば壁によりかかった安田がポケットから錠剤のシートをとりだす。

「睡眠薬だ。最近よく眠れなくてここの医師に処方してもらってる」

安田にも不眠症の気があるなんて初耳だ。言われてみれば顔色が冴えず、目の下には薄く隈が浮いている。

「……囚人には睡眠薬なんて処方してくれませんよね」

自然、皮肉が口をついてでる。

「眠れないのか」

「よく眠れていたら今頃こんなところにいません」

「確かに」

それきり黙りこんだ安田に背中を向け、サムライの肩を支えて歩き出す。サムライのほうが僕より背が高いから歩調があわずに苦労するが、ここで倒れるわけにはいかない。肩に回されたサムライの腕、そのぬくもりと重みを感じながら歩を運ぶ。安田はもう何も声をかけてこなかった。背中に注がれる安田の視線を意識しながら逃げるように廊下を曲がれば東棟へと通じる渡り廊下がのびている。

「げほっがほっ」

壁に阻まれて安田の姿が消えると同時に、深く深く上体を折ってはげしく咳き込む。よかった、なんとか安田の目の

届かないところまで我慢することができた。慣れないことはするもんじゃない、煙草、即ちニコチンに代表される有害毒素が濃縮された煙を吸引したせいで頭がくらくらする。最悪だ、これでもう三年は確実に寿命が縮まった。安田を筆頭に世にはびこる喫煙者は消極的な自殺志願者としか思えない、何故こんな不味いだけの、煙を吸い込めば苦しいだけの煙草をひっきりなしに吸えるんだ？

「大丈夫か？」

「大丈夫だ」

即座に煙草を投げ捨て涙目でむせ返れば、僕の肩によりかかったサムライに逆に心配される。情けない、なにをやってるんだ僕は。サムライをひきずるようにして途方もなく長い渡り廊下を歩きだせばニコチンの副作用で眩暈までしてくる。

「僕の心配より自分の心配をしろ、手首を捻ったんなら明日のペア戦は欠場したほうがいい」

「そういうわけにはいかない」

「無理をしたら二度と手が使えなくなるかもしれない」

「駄目だ」

「頑固だな君は、たまには僕の言うことを聞け。天才の言うことに間違いはない、絶対だ。ＩＱ180の頭脳に賭けて」

渡り廊下の半ばでおもむろにサムライが立ち止まる。

サムライを背負って廊下を歩いていた僕も必然的に立ち止まる格好になる。すぐそばにサムライの顔があり、浅い息遣いが聞こえてくる。右手首の腫れと痛みは悪化する一方らしく、包帯を巻いた手を庇い、僕の肩にもたれかかるようにして何とか二本足で立つ姿は痛々しげで見るに耐えない。右手首の激痛を堪え、意地でも明日の試合に出ると主張するサムライを叱責しようと口を開きかけた僕をひたと見据えたのは強い信念を宿した眼光。

「俺はもう、他の男にお前を抱かせたくない」